

曲目解説

Tema con Variazioni (主題と変奏)

Giuseppe Sirlen Milanesi (ジュゼッペ・シレン・ミラネージ) 作曲

作者は 1891 年 3 月 26 日イタリアのバッタローネ生まれ、1950 年 12 月 4 日ミラノに逝った作曲家。

ミラノの音楽学学校卒業。作品はオペレッタや管弦楽曲など多岐にわたっており、弦楽四重奏曲や吹奏楽曲の作曲コンクールに入賞した。特に人材の乏しいマンドリン界では新進気鋭の作曲家として注目を浴びた。

マンドリン作品では 1921 年「イル・プレットロ」誌主催の作曲コンクール第 1 部門(プレクトラム四重奏曲)に「四重奏曲」が 2 位に入賞し、第 3 部門 D の部(マンドリンソロまたはギターソロ)に「サラバンドとフーガ」が 1 位入賞した。

1923 年には、全イタリアマンドリン四重奏演奏コンクール(イタリアマンドリン連盟主催)課題曲選定の為の、四重奏曲作曲コンクールにて「春に寄す」が 1 位入賞した。1940 年にはシエナで行われた作曲コンクールでは「愉快な仲間」が第 4 位に入賞した。ミラネージはマンドリン曲に多く Sirlen Della Lanca の筆名を用いた。

本曲「主題と変奏」は 1925 年に発表された作品であり、マンドラ・テノーレを用いずにヴィオラと同じ調弦のマンドラ・コントラルトが用いられ主題と四つの変奏からなり、特に 4 つの変奏はそれまで見られなかった異なった性格を持った手法で綴られた大変に魅力ある作品となっている。

| | | | | | | | |
|------|--------|-------------------|--------|-----------------|--------|--------------------------|-----|
| 主題 | 4/4 拍子 | Andante Cantabile | ト長調 | 第一変奏 | 3/8 拍子 | Allegretto | ト長調 |
| 第二変奏 | 6/8 拍子 | Andantino | ト長調 | 第三変奏 | 2/4 拍子 | Allegro con disinvoltura | ホ短調 |
| 調 | 第四変奏 | | 4/4 拍子 | Piuttosto Lento | | ト長調 | |

Scene Campestre (田園写景)

Salvatore Falbo Giangreco (サルバトーレ・ファルボ・ジャングレコ) 作曲

作者は (1872. 5. 28~1927. 4. 8) はイタリア、シチリア州シラクーザのアヴォラに生まれた作曲家。

作品にはオルガンと五声部による『Kyrie eleison(ミサ曲の第 1 曲)』、ヴァイオリンとピアノの為にロマンツァ、弦楽の為に Liilca、オペレッタ『王女の物語』、管弦楽の為に 3 楽章の組曲、など様々な分野で作品を残している。

マンドリン界に於いては「イル・プレットロ」誌主催の作曲コンコルソに度々入賞(第 1 回「セレナータ」、第 3 回「田園組曲」、第 4 回「序曲二短調」、第 5 回「組曲スペイン」「プレクトラム四重奏」)しており、そのいずれもが至宝と呼べる現代に生きる作品群である。本曲は 1910 年 10 月の第 3 回、作曲コンコルソに応募したときの作品である。

「田園」の風景を描いた表題音楽であるが、夕方の描写に始まり、夜を経て、夜明けの風景に至る、と言う着想は斬新でその和声に於いても作者のオリジナリティは十分に発揮されている。特にマンドリンのピッキングとトレモロの両奏法が効果的に組み合わせられており、第一楽章での緩急自在な展開は特筆すべきものである。

かつて多くの作曲家達が表せなかった色彩感をプレクトラム音楽の上で可能にした点で意義ある作品である。

1 黄昏の踊り 2 小夜曲 3 祭りの朝

浜辺の唄による変奏曲

中野 二郎 編作曲

原曲は成田為三が大正五年(1916年)24才の時作曲された歌曲でセノオ楽譜として大正七年に刊行されたものである。元々は明治43年1月東京音楽学校の、牛山 充(みつる)主宰の雑誌「音楽」が創刊され、大正2年8月「音楽」4巻8号に、林 古溪の詩「はまべ」が掲載される。歌詞は、林古溪が幼い日に湘南海岸(神奈川県辻堂東海岸付近)の浜辺を歩いた時の追憶をうたった様である。大正5年、成田為三が山田耕筰に作曲を学んでいた東京音楽学校在学中(22才)、牛山充に作曲の試作として、「はまべ」の詞を勧められ作曲した作品である。成田為三が「浜辺の歌」の旋律の動機や主題を、どこで、どんな思いで創作したかは不明。大正7年9月セノオ楽譜98番(独唱曲)として、「浜辺の歌」の楽譜が刊行され、初めて世に知れわたる。以後、成田為三の代表的な作品として、又日本の代表的歌曲として世界各国で歌われている。我が国マンドリン・ギター界の重鎮、中野二郎はこの名曲のイメージを壊さず、マンドリン・ギターだけの編成にかかわらず、見事なまでに浜辺の情景を表現している。シンプルな主題を巧みなオーケストレーションで変奏曲に創りかえた点では、編曲の域を超えたまさに創作に近いマンドリン合奏の最高傑作と言える。

抒情組曲「蝦夷」

鈴木 静一 作曲

本曲は、作者が北海道の或る海辺の村で一夏を過ごした時の作品で、自身の交響管弦楽の為の処女作である。当時官民を通じ、最も完備された交響楽団であった帝国海軍軍楽隊の交響楽団に捧げられ、1935年日比谷公会堂で初演された。後に若干の削除が加えられ1966年マンドリンオーケストラに移されたものである。

- 1 霧深き朝** 北夷の夏の海は冷やかで、朝はよく濃霧がおこる。その浜は日本海に面し、朝の陽を背にして眺める海は、渚を洗うさざ波もなく、大いなる湖のようで静かに漲っていた。朝霧は太陽の昇るにつれ、次第にうすれ濃藍の海が洋々と展開される。
- 2 牧場の歌** 曲はかっこうのなきごえを模したリズムに始まる。霧深い日や、日暮れには恐ろしいひくまが出る牧場も、日盛りは明るいのかな牧場である。そして臆病な馬も警戒を忘れ、三々五々群れ遊ぶ。可憐な子馬が群から離れるのを呼ぶ母馬のいななぎがその山裾の草原にエキゾチックな色どりを添えている。亜寒帯の木のこすえでなくかっこうの声が牧歌ムードをいやが上にも盛り上がる。
- 3 秋の声** 北夷の夏は短い。7月に入ると野山に桔梗が咲き、8月にはもう朝夕の空気が冷たくなる。やっと緑の濃くなった草むらに、そこはかとなく褐色がただよい、田は早くも白銀の穂を垂れる。木々の若緑から一足飛び、紅葉の気配を見せる。思いがけない渡鳥が南に向かって飛びのを見るのもこの頃である。木々の若緑から一足飛び、紅葉の気配を見せる。思いがけない渡鳥が南に向かって飛びのを見るのもこの頃である。
- 4 黄昏の帰還** 太陽が西に傾くと“やませ”と呼ぶ夕風が、一日中眠りこけていた海面に白波をたてる。この風を帆に受け多くの魚舟が帰ってくる。そして、寂しい北の海もこの時だけ、澆刺と活気づく。快走する魚舟は漁の豊かさを思わせ、浜には人影が並び、西に広がる海洋に落ちる太陽は雄大である。夕陽が水平線に近づくと、海はまばゆく輝く。その海面を次々と魚舟のシルエットが横切る。舳先に碎ける飛沫が朱色の宝石を撒きちらすが、かぎりなく華やかである。輝かしい一日のフィナーレである。

(鈴木静一記)